

十四日～二十五日に、その中の二つの大学を視察して関係者にインタビューした。日本人が長い間、「発展途上国」と考えていたシンガポールの大学が大きく変貌している。シンガポールは世界の高等教育界において「東洋のボストン」になることを目指し、二〇一八年までに留学生二〇万人を受け入れることを国策としている。人口四〇〇万人ほどの小国が二〇万人の留学

スの設置にも意欲的である。発展の大きな原動力となっているのが、従来の伝統的なイギリス教育からアメリカ教育への転換にある。

SMUは新しい大学で、その名の通り、マネジメント（経営学）などのビジネスに特化した大学でシンガポールの中心地にある。シンガポールは、伝統的にイギリスの影響が強く、イギリス王デルが多いが、SMUはアメリカのウォートン・ビジネス・スクールをモデルに設立された新しい大学である。

会に送り出すものでインダストリアル・エンジニアリング、マーケティング、マネジメントなど、専門性の高い学問を身につけるように思われるが違う。これは、教員・企業・学生が一体となってカリキュラム・プロジェクト、就活までが連続して行われるものである。たとえば、大学は企業からプロジェクトを受け、一緒に研究成果を追求する。

着けていることの証でもある。SMU-Xでは、多くのプロジェクトを取組み上げて学内で教授・学生・企業が一緒に取り組んで解決している。企業担当者がメンターリングを行うことで、解決策がよき企業の求めるものになら、という特徴がある。

社会に通用するアクティブラーニング シンガポールマネジメント大学

- 1 -

カリキュラムの目的は、グローバルな問題を解決する際に新しい技能を習得して、その知識を適用するために学生を

これは、雇用者に評価される技能を学生に身に付けてさせるもので、学生の履歴書と産業ネットワークを確立して二十一世紀の技能と価値を浸透させ、グローバル市場での学生のエンプロイアビリティを高めることにつながる。

トにかかる、教室外時間に大部分を費やすことになる。このようなスペースの考えは、これまでのSMUに欠けていたという。

は実社会に「ながるプロジェクト」を遂行するため情熱を燃やしていく。その証拠に大学のキャンパスは二四時間開放され、二四時間飲食ができる場所が確保されている。仮眠のためにスリーピング・バッグを持ち込む部屋もある。寸暇も惜しまず、学ぶという姿勢は日本の一九六〇年代を彷彿させるものである。(つづく)



All about SMU->

帝京大学高等
教育開発センター 十五

生を受け入れることは、日本の人口に換算すれば、実に六〇〇万人の留学生を受け入れることに匹敵する大事業であり、いかに野心的な計画であるかが明白である。実際に、キャンパスを訪れる多くの多様な留学生で活気にあふれていた。多様な人種が活発に相互交流することで「化学反応」を引き起こす。

それだけではない。この国は「ワールド・クラウス大学（WCU）」の誘致・連携と海外キャンパスの設置にも意欲的である。発展の大きな原動力となるべく、従来の伝統的なイギリス教育からアメリカ教育への転換にある。

「大社連携」の重要性の再認識

シンガポールではアクティブラーニングが社会に浸透している。日本では二〇二〇年の学習指導要領から初等中等学校にアクティブラーニングを導入することになつている。しかし、日本では、

アクティブラーニングを「学習」するものとの考え方が強いため、社会に出た後にアクティブラーニングが十分に發揮されないよう思われる。何のためのアクティブラーニングなのか、疑問を抱かずにはいられない。社会に通用するアクティブラーニングが強く求められる所以である。現在、大学は「高大接続」に重点が置かれ、肝心な「大社連携」、すなはち、大学と社会のつながりが十分に考慮されていない。

第 6 回 第 2 部 第 1 章
「ソシエティ・アカデミー」の
リハーサルセッション "Bridge-
ing Academia and Practice" の
実践授業 "Academia and Practice" (アカデミーと
企業との連携) の実践授業 "Prac-
tice (実践)"、アカデミーと企
業との連携が "X-X" で実現さ
れるのがソシエティ・アカデ
ミー。
X= "Expertise" & "Experi
ence"、
X= "Expertise" & "Experience"
の上記、在学中に学生たる
に社会経験を積んで実社
会に通じる。
「ソシエティ・アカデミー」
の実践授業 "Academia and Practice" (アカデミーと
企業との連携) の実践授業 "Prac-
tice (実践)"、アカデミーと企
業との連携が "X-X" で実現さ
れるのがソシエティ・アカデ
ミー。
X= "Expertise" & "Experi
ence"、
X= "Expertise" & "Experience"
の上記、在学中に学生たる
に社会経験を積んで実社
会に通じる。

（of Teaching）のJUPITERではある。JUPITERでは、アクティブラーニングやコラボラティブラーニングの技法を使って、習者中心の教育を行っていく。現在、この“X”を担当する教員と通常は講義およびゼミを担当する教員に区別はない。そのための研修も行われない。すなわち、教員もアクティブラーニングやコラボラティブラーニングの技法を身に着けていることの証でもある。SMU-Xでは、一つのプロジェクトを取り上げて学内で教授・学生・企業が一緒に取り組んで解決している。企業担当者がメンターリングをうじて、解決策が企業の求めるものになるという特徴がある。

プロジェクトを通して、企業は有能な学生になりクルーできる。それに、学生はフレッシュな

アイデアを企業に持ち込むことがである。企業は自分の会社のことは知っているが柔軟性乏しいところがある。「生は企業の求めに対し知らないことも多いが、逆に、企業に対して素な疑問を投げかけることで新たな視点を見出す。」というメリットもある。若い世代のクリエイントの獲得につながるメリットもあり、新規事業開拓の一助となる。
以下は、SMU-Xのコンセプトと、表現したものである。ユーチューブの動画もあるのでそちらも参考にしてもらいたい。

る。これは、学生を中心とした学習に「コミュニケーション・パートナー」として、専門的技術や産業特有の観点をSMU-Xにもたらし、トレーニングの知識と多用な視点からのアプローチで、協力して作業ができる。SMU-Xでは問題を取り組むには、多様な方法があることを理解させることで、トレーニングで補われた人的価値に焦点を合わせることで、新しい未知の仕事に挑戦し、学生とパートナーがより良く準備できるにする。

次がSMU-Xのカリキュラムで以下の特徴がある。そこではプロジェクトに重点が置かれ、経験学習に基づくアカデミーを結合させる。さらに、トレーニングの知識と技能を活用して、学際的な問題と課題に取り組むことのできる有能な学

生を育てる。企業や官公署部門とパートナーを組み、ベースが重要で、SMUのXの学生はプロジェクトを高めることにつながる。

最後がスペースである。ここでは物理的なスペースが活発なメンターリングにかかることで、学生にとって最大限の利益が得られる。教室外学習を用いることで、教授陣が世界的な理論と適合でき、パートナーの学習を深め、学生をより良く理解できる。急速な経済状態の変化に鑑み、継続的な学習の必要性を学生とパートナーに積極的に教えることができる。

カリキュラムの目的は、クローバルな問題を解決する際に新しい技能を習得して、その知識を適用するために学生を動機づけることである。これは、雇用者に評価される技能を学生に身に付けてさせるもので、学生の履歴書と産業ネットワークを確立して二十一世紀の技能と価値を浸透させてグローバル市場での学生のエンプロイアビリティを高めることにつながる。

は、実社会につながるプロジェクトを遂行するためには、情熱を燃やしていく。その証拠に大学のキャンパスは二四時間開放され、二四時間飲食ができる場所が確保されている。仮眠のためにスリーピング・バッグを持ち込む部屋もある。寸暇も惜しまず、学ぶという姿勢は日本の一九六〇年代を彷彿させるものである。(つづく)

SPACES FOR GROUPWORK

CURRICULUM BASED ON EXPERIENTIAL LEARNING

All about SMU-X

帝京大学高等
教育開発センター

土持ゲーリー法

ル国立大学医学部(Duke University)は名称の通り、アメリカのノースカロライナ州の名門Duke University医学部とシンガポール国立大学がドッキングして新たに設立された。この大学が世界的に注目されるものになったのは、医学部で採用されている教授法である。日本医学部と同様、ほとんどの医学部はPBL(問題中心型学習)として講義のみならず、臨床も行っている。しかし、アメリカでは最近、PBLによってBL(チーム中心型学習)という教授法を導入している。全世界にてBLを導入して世界を驚かせたのがDuke - NUS医学部である。(註題が、帝京大学高等教育開発センターによれば、サイトの井永佳史学長と、リンク博士の対談) ZIKS編組のシガボール版 Duke - NUS医学部はアメリカをモチーフにしてしまった。したがって、医学

年齢も一二歳からである。この国では、男子は兵役が課せられ、二年間、軍隊に由兵する義務が成然して、多くの印象を強く受けた。約六七名の超Hコート医学生は、一定程度のチームに分かれ、講義やグループ討論を行っていた。したがって、授業の特徴は、NHKの「総合診療医」クターGに酷似している。特定の病名をチームで推理・議論して診断するもので、チームとして多角的に検討を加えて結論を導き出すアクティブラーニング手法が終始一貫している。

Team LEADといつ新たな教授法 枝の上には教科書や資料が山積みされ、休息のためのピローが端に置かれていたのが印象的であった。学生は、その日の授業のための準備学習に必要なだけの時間を費やしたが尋ねたら、「大時間」との返答があった。嘘だらうと疑つて、他の

学生に尋ねたが、「七壁問題」への回答があつた。
このHコーム医学生が卒業後、どのよだれ腺スムーズを探してゐるが尋ねたところ、國の發展に貢献したとか、くわば地医療に携わったかの「優等生」の回答が返つてきただ。どの学生も目が輝いて、将来の夢に向かって邁進していく。医学生と一緒に「食をしながら、多くのことを学んだ」。
前述のとおり、最大の問題となり、「課題」が提示

Duke - NUS医学部担当者一人、スマッシュ・ロットン博士は、TBのアプローチに「アメリカ式」とおもと指摘している。それでは、学習のための教材が事前に提供されることである。学生は、指定された学習をした後に、このクラスに出席するのによつて、社会で生じるような準備は少なく、

大学は「実験の場」であることは重要なことである。すると位置づけている。社会では失敗は許されないが、大学なら許容される。なぜなら、失敗も学ぶ必要があるからである。したがって、PBL にせよ、TBL にせよ、十分に課題と教材を考え失敗しながら学習させることも重要である。余談になるが、『朝日新聞』電子版(2016年12月21日)は「ノーベル賞の医学生理学賞を受賞した大隅良典・東京工業大学栄誉教授が「失敗の大切さ」を訴えたことが紹介された。

コンピュート博士へのインタビューで印象的であったのは、教室外学習と確認試験の関係であった。たとえば、教室外で学習したことと教室内で試験をして成績に加算す

敗の大切さ訴え 科技相と面会」との見出しが報道している。その中で、ノーベル賞医学生理学賞を受賞した大隅良典・東京工業大学栄誉教授が「失敗の大切さ」を訴えたことが紹介された。

コンピュート博士へのインタビューで印象的であったのは、教室外学習と確認試験の関係であった。たとえば、教室外で学習をして成績に加算す

が六五～七五点となるような厳しいものを想定している。すべての学生が九五点あるいは一〇〇点を取るようでは、チークでも討論することができなくなる。なぜなら、チークとしての「価値」は、イスカッシュョンにあるからである。チークではなく、

学習をしなくても良いが成績が取れるので一所懸念にせば、PBL にせば、生徒は真面目に勉強をしない。教室に置かれていた。すなはち、学生の成績の平均点

せなら、易しいと十分な学習をしなくても良いが成績が取れるので一所懸念にせば、生徒は真面目に勉強をしない。教室に置かれていた。すなはち、学生の成績の平均点

にやらない。確認試験が必ず成績に反映させるようにする。そして、難い試験が望ましい。試験の重みは六五～七五の間

大学は「実験の場」であることは重要なことである。すると位置づけている。社会では失敗は許されないが、大学なら許容される。なぜなら、失敗も学ぶ必要があるからである。したがって、PBL にせよ、TBL にせよ、十分に課題と教材を考え失敗しながら学習させることも重要である。余談になるが、『朝日新聞』電子版(2016年12月21日)は「ノーベル賞の医学生理学賞を受賞した大隅良典・東京工業大学栄誉教授が「失敗の大切さ」を訴えたことが紹介された。

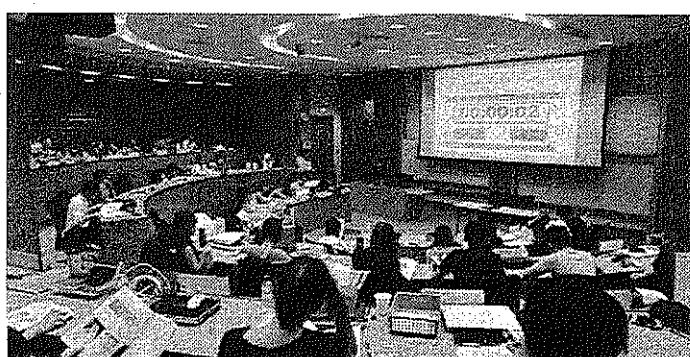
コンピュート博士へのインタビューで印象的であったのは、教室外学習と確認試験の関係であった。たとえば、教室外で学習をして成績に加算す

社会に通用するアクティブラーニング

のシンガポール大学

デューク・シンガホール 国立大学 医学部

- 2 -



王潮
王潮，字子厚，号东台，元代人。元朝初期的文人，以诗文著称于世。